（2）例外ネギ先生

「空白五年」にあって、加藤が心動かされたことが皆無ではなかった。それは「ネギ」とあだ名される図画の高城次郎先生（『羊の歌』では高木先生となっている）が「監督なしの試験」を実施したときのことである。生徒たちに「教育の目的は、不正をしようと思えばできるところで、不正をしない人間をつくることだ。その方が試験の成績よりもどれほど大切かわからない」といい、要するに「ノーブレス・オブリージュ noblesse oblige」を求めたのである（これも当時の東京府立一中が標榜していた徳である）。しかし、その目論見はものの見事に失敗し、試験の不正が行われた。ネギ先生は落胆して生徒たちに語りかける。「諸君は私の信頼を裏切ったばかりではなく、正直に試験を受けた諸君の仲間を裏切った」と沈んだ声が教室内に響いた。加藤はこのときのネギ先生の言葉を「ほとんどことばどおりにおぼえています」と書く。加藤はこの不正に加わらなかったが、ネギ先生の言葉は深く心に刻まれたのである。

「平河町の中学校では私は多くの教師に出会った。その大部分は有能な専門家であり、また何人かは好ましい人物であったにちがいない。しかし誰からも――おそらくあの瞬間の高城先生を例外として――趣味の上でも、人格の上でも、あるいは話が大げさになるが、世界観の上でも、私はほとんど全く何らの影響をうけなかった」と述懐するのである。